

The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter

外国語教育評価学会

Vol. 2 No. 2

外国語教育評価学会 (JLTA)

〒235-0045 横浜市磯子区洋光台6-29-6

TEL/FAX 045-833-5610

1998(平成10)年3月30日発行

ニューズレター編集委員会

振替 0220-7-7369

Cautionary Tales: On Measuring Things and Measuring Constructs

Thrasher, Randy

In the field of language testing we speak of measuring language ability and use numbers to report our 'measurements' so that it is all too easy to fall into the fallacy of considering measurement of language ability to be akin to measurement in the physical sciences or even in the world of carpenters, seamstresses, and surveyors. If asked, anyone knowledgeable in language testing will explain that we are measuring psychological constructs not physical objects and therefore the scales we use cannot be considered the same as the carpenter's rule, the seamstresses tape measure, or the surveyor's chains. We 'know' this and yet all too often treat the numbers generated by our tests as not so different than the number we get if we measure the length of a table.

One obvious sign of our failure to keep these two types of measurement separate is the common failure to report 'error of measurement' estimates. The seamstress doesn't have to worry about cutting the cloth a few millimeters longer or shorter than the pattern calls for. That's why her instructions don't say things like cut off a 10 centimeter (plus or minus 0.5 centimeters) wide strip. And our usual way of reporting test scores looks like the instructions to seamstresses--even when we have an estimate of the SEM (standard error of measurement) for our test. TOEFL, for example, doesn't tell test takers that their score is 545 plus or minus 15. And our failure to report test scores in this way can have significant effects on the test taker.

Think of the admissions officer whose school requires non-English speaking applicants to obtain a TOEFL score of 550 before they will be considered. The student whose TOEFL report form says 545 will be rejected out of hand. However, the one whose English ability is stated as being somewhere between 530 and 560 might get more consideration.

Yet, our tendency to forget to report, or even calculate, the SEM is not an illustration of the fundamental difference between measuring physical objects and measuring psychological constructs. To claim that some object is 20 centimeters long is to make a statement that anyone can interpret. A centimeter is a centimeter. But to say that a person's TOEFL score is 545 is to make a statement that needs to be interpreted. In other words, we know what 20 centimeters long means but we have to be told or figure out what a test score means. The first thing we have to know is what construct the test writer is attempting to measure. We also want to know how the test result translates into ability to deal with situations in the real world, but we can only figure this out if we have an acceptable answer to our first question. Only if the construct is reasonable, can we have any confidence that the supposed connection between the test score and real world performance is correct. (International Christian University)

第1回全国研究大会開催

日時: 平成9年11月8日(土) 9:00-19:00

会場: 東京経済大学6号館

大会テーマ: 「言語教育と測定・評価」

日程: 8:30~受付(6号館1階)

9:00~11:30 PCワークショップ(事前申込制)

1 「インターネットによる文献検索と資料

収集法」(5階F504)

上村隆一(福岡工業大学)

2 「テストデータの分析法」(5階F505)

大友賢二(常磐大学)

中村洋一(長野県篠ノ井高校)

11:30~12:30 昼食(葵陵会館食堂)

総合司会 中村優治(東京経済大学)

12:30~12:40 開会の挨拶(7階中会議室3)

会長 大友賢二(常磐大学)

12:40~13:50 基調講演(7階中会議室3)

「英語教育と評価—外国語能力に迫る—」

岡秀夫氏(東京大学)

14:00~15:30 研究発表(発表20分, 質疑10分)

第1室(7階中会議室1)

司会 清川英男(和洋女子大学)

①「内容重視のテスト形式」 杉野俊子(防衛大学校)

②「ALTの authentic English 使用に関するアンケート調査」 中村洋一(長野県篠ノ井高校)

③Comparison of Attractiveness in Multiple-choice and Dichotomous Judgement Item

安間一雄(玉川大学)

第2室(7階中会議室2)

司会 清水裕子(近畿大学)

①「英語聴解力テストにおける項目分析」

土平泰子(信州豊南女子短期大学)

②「オーラル・コミュニケーション能力を重視したリスニングテスト: 問題作成条件がテスト成績に及ぼす影響」 木下正義(福岡女子短期大学), 石井和仁(福岡大学), 大津敦史(福岡大学), 川尻徳(宮竹中学校), 島谷浩(九州共立大学), 高梨芳郎(福岡教育大学), Laskowski, Terry(熊本大学)

③Does Prepping for a Standardized Test Help?

Robb, Thomas(京都産業大学), Ercanbrack, Jay(京都産業大学), Ross, Steven(関西学院大学)

15:40~16:50 基調講演(7階中会議室3)

「テストとコンピューターテスト方法の技術革新—」

池田央氏(立教大学)

16:50~17:10 懇談会(7階中会議室3)

石川祥一(防衛大学校)

閉会の挨拶 Thrasher, Randy(国際基督教大学)

17:10~19:00 懇親会(7階中会議室2)

司会 小山由紀江(長岡技術科学大学)

第1回全国研究大会を終えて

§§ 会場校報告 § §

外国語教育評価学会第1回全国研究大会開催校責任者として、会員の方々及び当日参加の方々に心より御礼申します。皆様のご協力により大会も成功裡に終わり、今はただただ安堵感で一杯です。当日は天気にも恵まれ、全国各地から53名の方の参加者をお迎えすることができました。大会中皆様にはご迷惑のかからぬよう、できるだけプログラムに沿って進行に努めたつもりですが、細かい点で不行き届きの部分があったことを心よりお詫び申し上げます。

皆様からの今後の更なるご協力をお願いしまして、大会開催校のご報告とさせていただきます。(中村優治・東京経済大学)

§ § 講演・発表概要 § §

< 基調講演 >

「英語教育と評価—外国語能力に迫る—」

岡秀夫氏(東京大)

岡先生の講演は、冒頭からドキリとさせられるものだった。「私の講演を評価して下さい。」という言葉で、始まったのだ。「評価には様々な観点があり、全員の評価が全く同じ結果になるなら、評価について論ずる必要はないのだ。」と。その通りだと思い、話の続きがますます楽しみになった。

まず、外国語教育における評価の歴史的推移について概括的な話がされた。伝統的評価法から始めて、構造言語学に伴って登場した discrete point tests, 70年代からの統合的テストに至るまでの内容が網羅されたものだった。

第2に現実のテストの問題に関わって、何種類かのテストについて、例に即した問題提起がなされた。ここでは、入試の英語得点と総合得点の相関の高さ、英検の資格を単位に振り替えることの是非、TOEFL, TOEICなどの得点が実際の全体的英語能力を測っているかどうかという事に対する疑問など、現存するテストを考える上での有意義な指摘がされた。また、現実的な問題として考えなければならないこととして、先生自らが日常の授業の中で行き当たった note-taking のスキルの評価の難しさ等も、報告された。

第3の話題は、英語教育の目指すところは何か、という問いかけであったように思う。ある teaching についてその目的が明確でなければ、習得内容を評価することは不可能である。ここで、二つの視点から、英語教育の目的が論じられた。Communicative competence は外国語能力を捉えるのに必要十分かという点と、bilingual になることが英語教育の目的かという点である。Communicative competence との関連では、英語が世界的規模で使われている現状で国際的コミュニケーションに必要な条件として二つのファクターが指摘されたが、発音などの eligibility と、社会言語学的知識の体系の共有である。前者の例としては、think の th の発音([tʃ], [θ] は容認され[s] は不可)が挙げられ、後者の例としては「リンカーンの奴隷解放」(socio-linguistic competence) やファーストフード店などでの応対(strategic competence)などが挙げ

られた。これを Krashen の $I+1$ の図式に関連させて、1に当たる新情報が $S(P+K)$ (S =communication strategy, P =現在の知識からのボトムアップ的処理, K =世界に関する共通知識)よりも小さければ、トップダウンの機能が働いて communication が成立し、新情報がそれよりも大きければ communication が崩壊するという図式が提言された。これは、国際的コミュニケーションの必要性がますます高まっている現在、大変示唆的な提言である。

Bilingual については、これまでの捉え方を見直す必要が指摘され、新しい考え方が示された。従来は bilingual とは二つの言語がどちらも理想的に使えるという意味で考えられることが多く、L1 あるいは L2 の劣った部分ばかりを見てしまいがちであった。しかし、bilingual とは monolingual の単一尺度では測り得ない言語能力であり、それぞれ違う部分が欠けた、異なった尺度で捉えられるべき言語能力である。続けて、以上二つのファクターが、国際的コミュニケーションに必要な、communication に対する感受性の豊かさと、diverse thinking、異文化に対する柔軟性を考える上で、非常に貴重な視点であることも提言された。最後に bicultural 度を測るテストとして、“If the work is too hard, ……” という台詞に何を続けるかという楽しい例が出された。(私なら I'd try to find a way to make it easier. だろうか ……?) 外国語能力を測る、より有用なより良いテスト作りへの要請が現在ほど高まっている時期はかつて無い。この基調講演が終わって、そのようなテストを作成することへの責任と、そのための研鑽をさらに積まなければならないことを、ますます痛感させられた。岡先生の素敵な蝶ネクタイのプラス点10点(?!)も含めて、この基調講演は私にとっては pass の criteria をはるかに越えるものであったことを明記したい。(もっとも、inter-rater reliability の統計処理はまだ行っていないが。)

(記録: 小山 由紀江・長岡技術科学大学)

<研究発表> (第1室)

「内容重視のテスト形式—Content-based Testing」(杉野俊子・防衛大)は内容重視の授業の進め方とそのテスト形式、評価についての実践報告で学生と教師が楽しんで受け、採点するための工夫(例えば、物語の結末を学生に考えさせる問題など)が紹介された。採点の時間はやや増えるが、採点基準を工夫すれば、学期末テストならば実施するのが予想より容易であろう。

「ALT の authentic English 使用に関するアンケート調査」(中村洋一・長野県篠ノ井高)は20名のALTの回答を分析したもので、authentic English を使った場合、「速いスピードに生徒がついていけない」など、生徒の感じる困難点の報告があった。

“Comparison of attractiveness in multiple-choice and dichotomous judgement items”(安間一雄・玉川大学)は大学生を被験者にした、選択肢のある文法問題のテスト結果の報告である。難易度を変え、問題のサンプルをさらに増やして調査し、より一般化した結論を出してほしい。第二室に比

べて参加者が比較的少なかったことが残念であった。

(文責: 清川英男・和洋女子大)

第2室

「英語聴解力テストと項目分析」(土平泰子・信州豊南女子短大)は、50問からなる聴解力テストを実施し($n=297$)、被験者のテスト慣れ(TOEFL, TOEIC 等の受験経験の有無)とテスト項目のタイプとの相関関係を分析した研究。テスト項目のタイプについては、内容分析による分類や、質問文および選択肢の語数や命題の割合などの構造分析による分類および否定情報を伴った項目、熟語の知識に関わる項目等に分け、the Mantel-Haenzel (MH) procedure を用いて Differential Item Functioning (DIF) の値をもとに分析している。その結果、選択肢における命題の割合が大きい項目、否定的情報や一般常識に反する情報が含まれる項目および質問文中の語数が少ない項目ほど、試験慣れしていない者には不利であるということが観察された。

発話速度を含め多様な変数がリスニングには関わっているため、実験・分析方法で考慮すべきことが多いが、EFL 学習者を対象にした test-wisness に関する先行研究は少なく、本研究の意義は大きい。また、英語力の違いをも変数とした分析にも興味を覚える。

「オーラル・コミュニケーション能力を重視したリスニング・テスト: 問題出題条件がテスト成績に及ぼす影響」(木下正義・福岡女子短大、石井和仁・福岡大、大津教史・福岡大、川尻徳・宮竹中、島谷浩・九州共立大、高梨芳郎・福岡教育大、Laskowski, Terry・熊本大)は、高校生を対象としたオーラル・コミュニケーション能力を重視したリスニング・テストの研究と開発を手掛けてきた研究グループによる、< 試行テスト > と出題条件を変えることにより改良を加えた < 本テスト > の結果の比較、およびアンケート調査に見られた受験者の反応の分析結果の報告。

標準テストの開発ではパイロットテストを重ね、項目の改良を行わなければならないが、本研究では、問題文を聞く回数、指示や問題文を読む時間の長短、解答方法の違い(書き込みか選択肢か)、解答時間の長短等の出題条件を変えることで、より信頼度が高く、弁別力があるテスト開発が行われた。

本テストでは問題文の改良も行われているため、試行一本テスト間に、前述以外の変数も関わっているが、同一問題を用いて出題条件を変えた場合に、学習者のレベルによってどのような差が生じるかという研究の必要性も感じた。

“Does prepping for a standardized test help?” (Robb, Thomas・京都産業大、Ercanbrack, Jay・京都産業大、Ross, Steven・関西学院大)は、英語専攻と非英語専攻の大学生を、クラスに応じてそれぞれ 1) TOEIC Preparation, 2) Business English, 3) “General” English の3群に分け、いわゆる test-taking strategies の学習(ここでは、TOEIC 対策の教科書を用いた授業)の効果が TOEIC の得点にいかにか影響するかに関して、gain scores を用いて分析した研究。

約8カ月後の事後テストでは、英語専攻のグループの全

ての群において読解、聴解ともにある程度の得点の伸びが見られたが、統計的に有意な変化ではなかった。非英語専攻グループでは、TOEIC Preparation群の読解パートにのみ統計的に有意な伸びが観察された。

本研究では、指導者の違いにより得点伸長に差があったり、gain scoresを用いているために、処遇前の英語力差と学習効果の関係が多少不明確であった。また、practice effectや他の英語授業・学習の影響など統制し難い変数も多いが、ESL/EFLにおけるtest-taking strategiesの効果に関するこの種の研究は、今後ますます注目すべきものと言えるであろう。(文責:清水裕子・近畿大)

<基調講演>

「テストとコンピューターテスト方法の技術革新」

池田 央氏(立教大)

教育評価測定学、テスト理論、コンピューター理論の世界を常に先導して来られた池田先生のお話を拝聴する貴重な機会であったが、限られた時間の中で、CATの現状をテストの歴史の中に位置付け、アメリカの大変興味深い実践の紹介を交えながらコンピューター評価法の4つの発展段階と将来性を解り易く説明して下さい。

3つの試験革命として挙げられた1) 筆記試験(19C) 2) 客観テストと尺度の標準化(1910-20) 3) 個別テストとパフォーマンス(1980-90)の内、CATと密接に結び付いて発達して来た3) の分野は、日本では最近注目されて来ているが、未だ主流は一斉客観テストであり、アメリカの医学国家試験、建築士試験などの資格試験やETSの各種テストで既にコンピューター適応型の個別応答方式が採用され始めているというお話は新鮮で多くの示唆を含んでいた。

客観テストは、施行上の利点(正確な高速大量処理が可能)に加え、尺度の標準化と信頼性、妥当性などの概念の確立により同一の集団基準で相対評価ができるという点で将来も有用であろうが、「客観的にテストで測定されたもの=学力」という固定観念に対する警鐘としても、コンピューター援助による個別テストや、パフォーマンス重視の授業と連動した継続評価という新しい方向性を検討していく必要性を感じさせられた。

アメリカでは、90年代に入ってより臨場感のある本物志向(authentic)の測定を目指してパフォーマンステストの研究が急激に進み、それが個別のブースでマウスを使い「Drag & Drop」方式で画面上のシミュレーションによる問題に答えて行くというような資格試験の実施となって結実している。

それは、コンピューター評価法の発展段階の4世代の中では、マークシート式客観テストの高速大量処理(=第一世代)の時代に続く個別応答型のCAT(=第2世代)に当たり、更にパフォーマンステストは、授業と一体化した形成的(formative)評価を目指す連続測定(=第3世代)の時代に入っている。その後続く第4世代

になると、コンピューターが知識ベースと推論機構を持ち、判断支援システムとして採点即ち知的測定までしてしまうという夢のような話だが、現実に医師の試験では、シミュレーションで病気の診断や患者との応対を採点モデルを基に判定するというこれに近い段階まで行っているそうである。

このようなテストは、時間と場所を問わず、即時の応答採点が可能で、臨場感覚はあるがテスト感覚は無い(unobtrusive)という長所を持ち身障者対策も容易だが、これを実現するためには、膨大な項目の蓄積、問題作成や採点モデルの研究(上述の医師試験にはIRTが使われている)をする専門家の養成、情報管理体制の確立等が必要で、コストの面でも客観テストとは比較にならない程高くついてしまうのが現状のようである。

しかしコンピューター化は既にあらがえない趨勢でもあり、コンピューターによる継続評価は信頼性も高いので、日本では珍しく独立したテスト関連学会として発足した当会の将来に期待するという有り難いお言葉を頂いた。(記録:松本佳穂子・東京外語大(非))

The First JLTA Conference

Hubbell, Jeffrey

The First National Conference of the Japan Language Testing Association was held on November 8th at Tokyo Keizai University in Kokubunji. Over 50 participants attended the conference on the theme of "Language Education Measurement and Evaluation". At the conference sight things began at 9:00 with two pre-conference workshops. Ryuichi Kamimura took participants through steps for information retrieval via Internet while elsewhere participants were given hands-on experience with a new statistical software package for IRT-based test data analysis, TDAP, developed by Kenji Ohtomo and Youichi Nakamura..

After a short opening address by Kenji Ohtomo at 12:30, the first of two key-note speeches was given by Hideo Oka of Tokyo University. Professor Oka adopted Spolsky's three-stage history of language testing theory and practice; traditional or 'pre-scientific', modern or psychometric-structuralist, and post-modern or psycholinguistic-sociolinguistic, to demonstrate the shortcomings we must face in assessing language ability based on the samples we choose of knowledge or language tasks in our tests.

Next there were six short presentations of research in testing and evaluation in Japan. Tshiko Sugino demonstrated a method assessing of communicative skills from imaginative endings to stories presented in texts. Youichi Nakamura presented the results of a survey to show the degree of variation among native-

speakers ideas of 'naturalness' or 'acceptability' in EFL classes. Kazuo Anma used the results of logistical regression analysis to show that multiple-choice test items may introduce distinctions that are not related to the language ability that the test was intended to measure. Yasuko Tsuchihira presented the results of an item analysis of a listening test. Masayoshi Kinoshita, Kazuhito Ishii, Atsushi Otsu, Toku Kawajiri, Hiroshi Shimatani, Yoshiro Takanashi, and Terry Laskowski presented a study of how test tasks and scoring on a listening test relate to assessment of oral communication skills. Thomas Robb, Jay Ercanbrack, and Steven Ross examined the effects on TOEIC scores of using direct TOEIC preparation materials vs. standard 4-skill development materials.

A second key-note address was given by Prof. Hiroshi Ikeda of Rikkyo University on the developments in use of computers in test administration and test analysis in Japan since the 70s.—its past and future impact on test format, as well as how the increased accessibility of powerful statistical tools using IRT can aid in improving test characteristics and scoring. In a brief closing address Randy Thrasher gave an account of JLTA's conception at the Language Testing Research Colloquium held in Finland in 1996, and its goal of promoting testing research and practice in Japan in preparation for the coming of the 1999 LTRC & AILA conferences in Japan.

As an EFL educator who has been increasingly absorbed in issues of language testing here over the past 14 years, I have never felt so encouraged as I did while attending this conference. In a little over a year, the Japan Language Testing Association has made a significant contribution to this field by bringing together educators from all over the country to share their research and ideas. If the quality of experience in this first major conference is any indication, the condition of language testing in Japan is about to change much for the better. (法政大)

第 4 回 研究 例会

第4回例会は平成9年12月13日(土)午後1時30分より、関西大学千里山キャンパス100周年記念会館を会場として行われた。今回の例会は、立命館大学杉森幹彦先生の全面的なお世話で、関西地区在住会員の協力のもとで開催され、またJACET関西支部の支援を受け

た共催であった。発表内容は、「言語テストの理論と実践」服部千秋(神戸商科大非常勤講師)、「English Questions for University Entrance Examinations: Suggestions for Test-makers」David Peaty(立命館大学文学部)、「英語教育改善のために高校英語教員と大学入試問題作成者は今なにをすべきか—実証データを踏まえて—」鈴木寿一(大阪府立三国ヶ丘高校)。

第 5 回 研究 例会

第5回例会は平成10年2月14日(土)午後3時30分より、英教会議室(日本英語検定協会ビル3階)にて、JACETテスト研究会との共催で開催された。

今回は「外国語教育としての日本語」を取り上げてみました。内容は次の通り。「日本語教育における評価—コースにおける成績と修了後の評価—」村上京子(名古屋大学留学センター)、「中国における日本語教育—山東師範大学の場合—」高松美佐男(中国山東師範大学客員教授・和歌山日本語学校)。

第 6 回 研究 例会 について

平成10年度第1回研究例会を下記の要領で開催いたします。JACETテスト研究会との共催となります。

日時：平成10年5月9日(土)午後3時～5時30分
会場：英教会議室(日本英語検定協会ビル3階)地下鉄東西線神楽坂駅より徒歩約6分
・内容：「リーディングテストの妥当性の検証」
根岸雅史(東京外国語大学)

“Issues in Matching Assessment and Educational Objectives” Jeffrey King Hubbell(法政大学)
・参加費：会員1000円、一般1500円

会員の登録について

本会の賛助会員、団体会員としてご登録いただきました。誠にありがとうございます。

< 賛助会員 >

日能研学習評価研究所(代表者：松浦三郎)
〒151-0021 渋谷区恵比寿西2-3-14 TEL. 045-473-2311
E-mail: sabum@mb.infoweb.or.jp

(株)アルク教育システム開発室(担当者：平野琢也)
〒168-8610 杉並区永福2-54-12 TEL. 03-3327-1022
E-mail: hirano@alc.co.jp

< 団体会員 >

財団法人 中国残留孤児援護基金 中国帰国者定着促進センター(所長：濱野朔)
〒359-0042 所沢市並木6-4-2 TEL. 0429-93-1660
E-mail: kyomuka@kikokusha-center.or.jp

第2回全国研究大会の開催について

来年度（1998年度）の全国研究大会は下記の要領で開催することになりました。昨年より開催時を早めたのは、1999年7月に第21回LTRCが横浜で開催されることになりましたので、その時期に合わせたためです。会員のみなさまには発表等のご応募を何卒よろしくお願いたします。

日時：7月25日（土）・26日（日）
会場：東京経済大学（JR中央線・西武線
国分寺駅下車徒歩13分）

大会テーマ：「外国語教育における言語テストの役割と責任」

The Roles and Responsibility of Assessment in Foreign Language Education

- ・第1日7月25日（土）ワークショップ（講習会方式）・講演・懇親会等
- ・第2日7月26日（日）研究発表・シンポジウム・ワークショップ等

<発表募集>

1. 発表募集部門

- (1) 研究発表（発表時間30分+質疑応答10分）
- ・外国語教育の評価・教育及び関連諸科学の分野に関する理論的、実践的研究の成果
 - ・大会テーマの分野に関する研究

- (2) 実践報告（発表時間30分+質疑応答10分）
- ・外国語の授業についての報告

2. 応募資格

- (1) JLTA 会員であり、今年度の会費が納入済みであること。非会員の方は応募の時点で入会の手続きをとってください。連名での発表も全員が会員であることが条件です。
- (2) 発表は未発表に限ります。
- (3) 発表は必ず本人が行うものとします。

3. 応募原稿作成方法

- ・今回より、e-mailにて応募してもらうことになりましたのでご協力をお願い申し上げます。
- ・大会要綱はA4原稿をB5版に縮小印刷しますので、以下のことを勘案して原稿を送付してください。

- (1) 原稿入力・送信は「テキストファイル」か、word97、または「一太郎8」を添付ファイルとってください。
- (2) 発表要旨について：研究発表は研究の目的・仮説・方法・結論等、実践報告はシラバス等を、和文1200字、英文420～450 words、にまとめてください。発表言語で

原稿を作成し、和文の場合は英語のタイトルを付けてください。

- (3) 応募原稿は上記を考慮して、下記の順に入力してください。

・タイトル/所属/氏名 ・本文

4. E-mail 送信

- ・応募者の詳細を下記の順に作成して、①「応募者の詳細」、②「応募原稿」の順に送信してください。

<応募者の詳細>

- ・漢字氏名/ローマ字氏名 (English) の両方
- ・研究発表/実践報告の別
- ・発表題名 (日本語と英語、または英語)
- ・住所 (郵便番号、漢字で) / 電話/fax
- ・所属 (漢字/英語名の両方)
- ・身分 (教授/助教授/専任講師/助手/非常勤講師/大学院生/その他)
- ・発表の使用言語 (日本語/英語)
- ・使用機器 (VCR/OHP/CTR/PC/その他) 但し、PCの場合はご持参いただきます。

5. 発表の採択

- ・応募された発表については発表場所、その他の関係から審査をさせていただきます。採否については応募者全員にお知らせいたします。

6. 応募締め切り

- ・1998年6月1日（月）

7. E-mail の宛先

- ・応募原稿等は次の2カ所に同じものを送信してください。

<nkyj@tku.ac.jp> <isikawas@cc.nda.ac.jp>

<海外学会開催情報>

- ・June 10-11: Haifa University, Israel: Language Testing Odyssey 2001: "Approaches to Evaluation in a Technological Society" in Haifa, Israel.
E-mail: rhfl304@uvm.haifa.ac.
- ・July 13-17: Inaugural World Conference on Computer-Assisted Language Learning The University of Melbourne, Australia
E-mail: fauroy@ozemail.com.au
上記についての詳細は e-mail アドレス、又は関係機関にご照会ください。

本会へのお問い合わせは、

e-mail: ishikawas@ma4.justnet.ne.jp または、

fax 045-833-5610 にお願いたします。